九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 慶安五年刊『訳和和歌集』翻刻と解題 附校異（六）

内野, 優子
西南学院大学非常勤講師

https://doi.org/10.15017/10332

出版情報：文獻探究. 45, pp.75-90, 2007-03-30. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

# 慶安五年刊『訳和和歌集』翻刻と解題　附校異（六）

内野優子

## 翻刻

本稿は、通し番号437番から最後まで（499番）の翻刻である。凡例は先号の通り。底本の虫損箇所は□で示し、駒澤大学図書館所蔵『訳和和歌集』（慶安五年刊）によって補った。また今回、対校本である国文学研究資料館所蔵本（略号［承］）においても虫損が見られたため、その当該箇所を□で示し、同系統に分類される叡山文庫所蔵『法花訳和集』（承応二年刊）によって補った。

これまでと同様に、内閣文庫所蔵本の歌順の異同を予め記すが（歌番号は、底本の通し番号による）、詳しくは『文献探究』第43号の拙稿に掲げた「『訳和集』諸本対照表」を参照されたい。

450→452→451→453・・・489→491→490→492

（※内閣本には474番の歌はなく、詠者名と実海注のみを残す。）

（五・七・オ・四行目）

妙音菩薩品

衆宝蓮花のこゝろを

前大僧正慈鎮

437 鷲の山あまた蓮のひらけしを驚なからしる人そなき

妙音は釈尊の昔の弟子たるによりて出世の本懐をとけ給ふ霊山の筵に来給へりその瑞相としてまつ金銀等のたからにてつくりたる蓮花あまた出現せり文殊こ（七・ウ）れを見て何の故あつてかくのことく蓮花はおほく来れるそと仏に問奉りしに東方浄花宿王智と申仏の浄光荘厳国といふ国より妙音といふ大士のわれらよしありて只今きたるへしとの給ひ侍りされは此哥に驚なからしる人なしとは文殊を始として一会の大衆の事なり

【校異】（七・オ）⑤〈詞書〉―ナシ［内］、⑥前大僧正―ナシ［内］、⑧妙音は―妙音菩薩は［内］、⑧釈尊―釈迦［内］、⑧よりて―よつて

［内］、⑨筵（むしろ）―せき［内］、（七・ウ）①蓮花（れんけ）―蓮花の［内］、②あつて―ありて［内］、③来れるそと仏に問（とひ）奉りしに―来ると仏に問奉給ひしに［内］、④宿王智と申仏の―宿王智仏の［内］、④といふ国より―より［内］、⑤といふ―と云る［内］、⑤われら―我に［内］、⑦哥に―哥は［内］、⑧大衆―衆［内］

不レ鼓自鳴（サルニウタヲノツカラナル）のこゝろを

438 鷲の山妙なる声の光には風ふかねとも嶺の松風

妙音（めうおん）は昔雲雷音王（むかしうんらいおんわう）と申仏の御もとにして十万種（しゆ）の妓楽（ぎがく）をもつて彼仏（かの）を供養（くやう）し奉しむくひに種（しゆ）ゝの妓楽の身をはなれぬ事をいへり松風は琴（こと）のねによせ侍るか　（八・オ）

【校異】（七・ウ）⑨のこゝろを―ナシ［内］、（八・オ）①王と申仏―王仏［内］、①にして―にて［内］、③むくひに―むくひにて［内］、③の身―ナシ［内］

赤染衛門

439 爰にのみ有とやは見るいつくにも妙なる声に法をこそきけ

【校異】（八・オ）集付ナシ―風雅［内］、⑥爰（夢カ）―爰［内］、⑥声―音［内］

中納言定資

440 身をかへてあまたにみえし姿こそ人をもらさぬ誓成けれ

この大士は卅四身に身をかへ十方恒沙（がしや）の世界（せかい）にあまねくいたりて説法（せつほう）して衆生をすくひ給ふ故にかくのことく読侍る歟　（八・ウ）

【校異】（八・オ）⑨かへ―かへて［内］、⑨十方―十万［内］、（八・ウ）①かくのことく読侍る歟―かく読る也［内］

及衆難処皆能救済（ヲヨヒモロ／＼ノナンジヨミナヨクサイス）のこゝろを

俊成

441 あらき海きひしき山の中なれと妙なる声はへたてさりけり

三途（づ）八難（なん）のあしき処にもゆひて利益（りやく）したまふ故に海山にたとへていへり

【校異】（八・ウ）②のこゝろを―ナシ［内］、集付ナシ―新続古［内］、④きひしき―さひしき［内］、④声―音［内］法［承］、⑤あしき処にも―悪処にも［内］、⑤ゆひて利益（りやく）したまふ故に―行て苦をすくひ給故にそれを［内］

堀川右大臣

442 しつむへき人をかなしと思ふには渕を瀬になす物にそ有ける

在‐処変現度二脱衆生一（サイシヨニヘンゲンシテドダツスルシユシヤウヲ）といふ文あり悪趣（あくしゆ）をも善趣（せんしゆ）と変（へん）する利益（りやく）のあれは渕（ふち）を瀬（せ）になすとたとへよみ侍るなり　（九・オ）

【校異】（八・ウ）⑩善趣（せんしゆ）と―善趣をもと［内］、⑩利益（りやく）の―利益［内］、（九・オ）①よみ侍るなり―侍り［内］

第八巻普門品（フモンホン）

大納言公任

443 世をすくふうちには誰か入さらむあまねき門は人しさゝねは

観音（くわんおん）大士の利益（りやく）はあまねく十界（かい）の門戸（もんこ）ををしひらき身を卅三に変（へん）し説（せつ）を十九種（しゆ）にわかちてをの〱ねかふ処（ところ）の法を説（とく）ゆへに此品の名を普門品（ふもんぼん）と名つけ侍り此門はひらけたるまてにてとつる事なけれは

誰かいらさらんといへり

【校異】（九・オ）③大納言―前大納言［内］、④誰か―たか［内］、④門は―門を［承］、⑤門戸を―門戸［内］、⑥卅三に変し説を―卅三身に変して願ふ所の法を［内］、⑧の名―ナシ［内］、⑧品と―品とは［内］、⑨ひらけたるまてにて―ひらけたるまゝにて［内］、⑩といへり―とは残る人なく入へしとなり［内］

若為二大水一所レ漂称二其名号一即得二浅処一（九・ウ）のこゝろをよみ侍りける

従三位光成

444 行水のふかき流にしつみても浅瀬ありとて猶頼むへき

【校異】（九・ウ）①為二大水一―以水［内］、②のこゝろをよみ侍りける―ナシ［内］、集付ナシ―新後撰［内］、④とて―とそ［内］［承］

平忠度

445 をり立て頼むとなれは飛鳥川渕も瀬になる物とこそきけ

此文は観音を称念する人七難をまぬかる
事を説中の水難を説文なり但まへの
哥は水底にしつみてなかれゆくともつゐに
浅せにあふへしとたのみをかけ後のうたは
飛鳥川の渕瀬にかはるによせて観音の
神力ふかき渕をあさき瀬に変せしめむ
といふこゝろなり（一〇・オ）

【校異】（九・ウ）⑤平忠度―平忠度朝臣［内］、集付ナシ―風雅［内］、⑦まぬかる―まぬかるゝ［内］、（一〇・オ）①渕瀬にかはるによせて―渕せはかはりやすきによせて［内］、②変せしめ―変しめ［内］

便得レ離レ欲のこゝろを

前大僧正慈鎮

446 小夜衣うらにも夢を覚る哉かさねし妻を思ひかへして

これは三毒の煩悩ふかゝ覧もの常に観音
を念し奉らはすなはちはなるへしと説文
の中に婬欲のはなるゝ相をよみ侍り
妻をかさねしをおもひかへして夢とさむ
るとなり（一〇・ウ）

【校異】（一〇・オ）④のこゝろを―ナシ［内］、⑤前大僧正―ナシ［内］、⑥覚る―覚る［承］、⑦ふかゝ覧もの―ふかき者［内］、⑧すなはち―ナシ［内］、⑧説文の中に婬欲の―かく文也今の哥は三毒のなかの婬欲を［内］、⑨侍り―侍るなれは［内］、⑩さむるとなり―さとるなり［内］

宿殖二徳本一衆人愛敬のこゝろを

頓阿

447 石上ふるの〻桜春ことにしるも知らぬも尋てそとふ

もし人あつて子を求て観音を念し奉ら
んに女子をえんとねかはゝ昔より徳の本
を殖たるかもろ〳〵の人に愛せられんをう
むへしとなり是を春きて花咲はしるも
しらぬも愛せる事によせ侍りふる野
といへるはむかし徳の本を殖たりといふ心を
いはむためなり石上ふるの〻野への桜花
殖けむ時をしる人そなきといふうたをと（一一・オ）

れりけり

【校異】（一〇・ウ）②のこゝろを—ナシ［内］、③頓阿—重阿法師［内］［承］、集付ナシ—新続古今［内］、⑤あつて—ナシ［内］、⑥徳(とく)—功徳［内］、⑦たるか—たるかと［内］、⑦うむへし—えへし［内］、⑨愛せる事に—桜を愛することくに［内］、⑨ふる野といへるは—石上ふる野と云ることは［内］、⑩たり—たる［内］、（一一・オ）①石上(いそのかみ)ふるのゝ野への桜花—ふるの山への桜花［内］、②といふうたをとれりけり—の心歟［内］

以㆓種々(モツテシユ〳〵ノカタチヲアソブモロ〳〵ノコクドニ)形㆒遊㆓諸国土㆒のこゝろを

慈鎮

## 448

さまく〳〵の心つくしに行舟やかはる姿にあふの松はら

あらゆる国なへての人の心にかなふて身を変(へん)し説法をかへて利益(りやく)し給ふなりたとへは月の衆水(しゆすい)にうつるかことしされは任運自(にんうんし)然(ぜん)の遊戯(ゆげ)なれ共人間界(にんけんかい)のならひになそらへて心つくしに行船とはいへりしかも人の **（一一・ウ）** 心にかなふ事をあふの松はらとゝめ侍れはその縁語(えんご)によせて心つくしといへり

【校異】（一一・オ）④国土(コクドニ)—国土㆒(コクドニ)［承］、④のこゝろを—ナシ［内］、⑦かなふて—かなひて［内］、⑨衆水にうつるかことし—諸人にしたかふかことし［内］、⑩界(かい)—思［内］、⑩なそらへて—なそへて［内］、（一一・ウ）③よせて—ナシ［内］、③いへり—云る歟［内］

施無畏者(セムイシャ)のこゝろを

## 449

おそれなき道にみちひく聖こそわか名にたちて人にしらるゝ

観音は此娑婆(しやば)世界の施無畏者(せむゐしや)とて人のおそれを除(のぞき)給へりかくてこそわか名をも人にしられ世にもあふかれ侍るとなり

【校異】（一一・ウ）④のこゝろを—ナシ［内］、⑤聖—光［承］、⑤たちて—たてゝ［内］［承］、⑤るゝ—るれ［内］［承］、⑥人のおそれを除(のぞき)—人をそれをのゝき［内］、⑧世にもあふかれ—ナシ［内］、⑧侍るとなり—侍れと也［内］

受㆓其瓔珞(ウケテソノヨウラクヲワケテナシテニフンニ)㆒分作㆓二分㆒のこゝろを

俊成

## 450

哀とやともに光を照しけむふたつにわけし玉のかさりを **（一二・オ）**

いまの品のとき観音(くはんをん)の功徳(くとく)を仏のとき給ふ事無尽意菩薩(むじんいぼさつ)の問(とひ)奉りしによつてなりさまく〳〵のことはりをきひて無尽意菩薩の頭(かしら)にかけたる玉のかさりをときて観音に奉り給ひしに観音これを二に分て釈迦(しやか)多宝(たほう)の二尊(そん)に奉れり仏もさそ無尽(むしん)意(い)の布施(ふせ)せし瓔珞(やうらく)の供養(くやう)をは哀(あはれ)とおほしめしけめといふ心なるへし

【校異】（一一・ウ）⑨のこゝろを—ナシ［内］、（一二・オ）①照しけむ—照すらん［内］、②いまの—此［内］、③事—ことは［内］、③奉りしによつてなり—奉るによりて［内］、④菩薩—ナシ［内］、⑤頭(かしら)—頚［内］、⑤かさり—錦［内］、⑧せし—して［内］、⑨けめといふ心なるへし—けんと云心なり［内］

451
誓ける心のやかて海なれは人を渡すにわつらひもなし
弘誓深如レ海歴レ劫不二思議一のこゝろを （一二・ウ）
【校異】（一二・オ）⑩〈詞書〉—ナシ［内］、〈詠者名ナシ〉—俊成［内］

崇徳院御製

452
誓をはちひろの海にたとふ也露も頼まは数に入なむ
【校異】（一二・ウ）〈詞書ナシ〉—弘誓深如海歴劫不思議の心をよませ給ひける［内］、集付ナシ—千載［内］

従二位家隆

453
渡すへき誓のふかき冬の海は氷も霜も結はさりけり
三首おなし文なり但はしめの哥は誓の海にやかて済度の舟をうかへ中はちひろのことくなる誓をたのむといひ後は八寒のくるしみもあらしといふこゝろなり
【校異】（一二・ウ）④従二位—ナシ［内］、⑤渡す—渡る［承］、⑥おなし文なり—同文の心なり［内］、⑥はしめの哥は誓の海にやかて済度の舟をうかへ中はちひろのことくなる誓をたのむといひ後は—初の御製は千尋の海のことくなるちかひを頼むと云中なる誓の海にやかて済度の舟をうかへ後哥は［内］、⑨あらし—有まし［内］

母の周忌に法花経をみつから書て巻〱の心をよみてへうしの絵にかゝせけるに （一三・オ）
八巻のこゝろを冬によせて

定家

454
歴劫のちかひの海に舟渡す生死の浪は冬あらく共
弘誓の海の舟人は生死のあらき海のなみ風をもおそるましといへるかや
【校異】（一二・ウ）⑩巻〱の—巻の［内］、（一三・オ）②よせて—寄てよみ給ふ也［内］、④歴劫—暦劫［内］、④ちかひ—弘誓［内］［承］、④渡す—わたせ［内］、④浪は冬—海は波［内］、⑤海のなみ風—冬の波風［内］、⑥いへるかや—云るにや［内］

心念不二空過一のこゝろを

前大僧正慈鎮

455
をしなへてむなしき空と思ひしに藤咲ぬれは紫の雲
念し奉る心むなしき物ならはそのしるしあ（一三・ウ）りかたししかれとも菩薩の約をたかへす度し給ふされは暮春に藤の咲ぬるか全体紫雲にて侍るといへるにや是すなはち観音は弥陀の脇士の薩埵なりかの来迎引摂のしるしにたつ紫雲をまのあたり藤花にて見侍るとや
【校異】（一三・オ）⑦のこゝろを—ナシ［内］、⑧前大僧正—ナシ［内］、⑩心—心は［内］、⑩ならは—なれは［内］、（一三・ウ）①菩薩の—菩薩［内］、②度し—応し［内］、②藤の—藤［内］、③紫雲—紫の雲［内］、③といへるにや—とは云るにや［内］、④弥陀の—弥陀［内］、④脇士—脇持［内］、⑤紫雲を—紫雲のを［内］、⑤藤花—藤の花［内］、⑥とや—と也［内］

456
頼てし猶たのむかな思ふことむなしく過ぬ人のめくみを
人とは観音の御事なり哥の心まへとおなし

【校異】（一三・ウ）⑦頼てし—憑ても［内］頼ても［承］、⑦めくみ—ちかひ［承］、⑧哥の心まへとおなし—ナシ［内］

457
なき人をとふらひて法花経を書て品〻の心をよませ侍りけるに火坑変成池のこゝろを
中納言為藤　（一四・オ）
なき人の別を鴛のねに立る思ひよ池の水とたになれ
なき跡に残り居てしたひこかるゝ思ひの火のくゆるさなからほのをとのほり侍るへしせめては池水のひやゝかなるに変せよといふ心也

【校異】（一三・ウ）⑨法花経を—法花経［内］、⑩よませ侍りけるに—哥によませ侍るに普門品の［内］、⑩のこゝろを—ナシ［内］、（一四・オ）②思ひよ—思ひに［内］、③〈左注〉—ナシ［内］

458
還着於本人のこゝろを
平宣時
あしかれと人をもいはし難波かた我身の上に帰るしら浪

【校異】（一四・オ）⑥のこゝろを—ナシ［内］、⑦宣時—定時［内］、集付ナシ—遺風［内］、⑧しら浪—うら波［内］

459
前大僧正慈鎮
白波もよせくるかたに帰る也人を難波のあしと思ふな
たとへは呪詛せらるゝ事あらむに観音を念　（一四・ウ）
し奉らはかへつて本人につくへしといへるこゝろなりこのゆへに難波の浦なみのよしあしによせてよめり

【校異】（一四・オ）⑨前大僧正慈鎮—大納言為世［内］前大納言為世［承］、集付ナシ—新千載［内］、（一四・ウ）①たとへは—たとひ［内］、②かへつて—かへりて［内］、②いへるこゝろなり—云るなり［内］、③このゆへに—かるかゆへに［内］、④よしあしによせてよめり—あしをこえ侍るによせ読るなり［内］

460
源兼氏
終に又いかなる道にまよふ共契しまゝのしるへわするな

【校異】（一四・ウ）〈詞書ナシ〉—種々諸悪趣［内］、⑤源兼氏—源兼氏朝臣［内］、集付ナシ—続千［内］

461
選子内親王
逢ことをいつくにとてか契るへき浮身のゆかむ方を知ねは
もろ〳〵の悪趣におちたらん人観音を念し侍らん功によりてこと〳〵く滅せしめむと説文なり前の哥はふかく此誓をたのもしと　（一五・オ）
なり後の哥は悪趣にめくりゆくさま定なしされは此世の中に後世とたのみても心ならすはいつくにかゆき侍らんとなけくよしなり

【校異】（一四・ウ）集付ナシ—新古［内］、⑧とてか—てとか［承］、⑧浮身—憂身［内］、⑨観音を—かねて観音を［内］、⑩功—功徳［内］、（一五・オ）①説—かく［内］、②なり—云り［内］、②悪趣にめくりゆくさま—悪趣より悪趣にめくり行有様［内］、③心ならすは—心ならす［内］、④ゆき—生れ行［内］

陀羅尼品
赤染衛門

462
法まもる誓をふかくたてつれは末の世まてもあせしとそ思
　　薬王勇施の二菩薩多聞持国の二天な
　　らひに十羅刹女ともに陀羅尼を説て護
　　法の契をたて給へはいかに末の世なりとも　（一五・ウ）
　　この法のあせ侍ることあらしと頼む心か
　　　つれも［内］
　　　　　　　　　　法印円勇
【校異】（一五・オ）集付ナシ―風雅［内］、（一五・ウ）①契を―誓をい

463
ゆきかへる雲の通路とをく共乙女の姿身をはなれし
【校異】ナシ

464
あまつ空雲の通路それならぬ乙女の姿いつか待みん
　　　　　　　　　　八条院高倉
【校異】（一五・ウ）集付ナシ―新勅［内］

465
十の名を法の筵に聞しよりけになつかしきいもかことのは
　　十羅刹女法花をたもつ人をは守護し侍らん
　　とて呪をとき侍るを待みんともなつかしき共
　　いへり妹とは女の事なり　（一六・オ）
　　　　　　　　　　前大僧正慈鎮
【校異】（一五・ウ）⑦前大僧正―ナシ［内］、⑧なつかしき―むつかしき［内］、⑨法花―法花経［内］、⑩呪―多羅尼［内］、⑩とき侍るを待みんとも―とき給ふことをたのもしく思ひ侍て身をはなれすとも待みんとも［内］

466
うれしきは花に風なき吉野山月も曇ぬさらしなの里
　　無二諸衰患一のこゝろを
　　毘沙門天のちかひにわか説たる呪の功力百
　　由旬のうちにうれへなからしめむといへりそ
　　れを花の風月の雲によせてよめる也
【校異】（一六・オ）②のこゝろを―ナシ［内］、③月も―月は［承］、④わか説たる呪の―ときたるたらは［内］、⑥風―あらし［内］

467
　　乃至夢中亦復莫レ悩のこゝろを
　　　　　　　　　　俊成
うつゝにはさらにもいはすぬる玉の夢の内にもはなれやはする
　　もろ〳〵の悪鬼きたりて法華の持者をな
　　やまさむに羅刹女守護してちかつけしと　（一六・ウ）
　　いへりうつゝの事はいふにおよはす夢のう
　　ちなりともちかつき侍らしといふありかた
　　きちかひなり
【校異】（一六・オ）⑦悩―悩［承］、⑦のこゝろを―ナシ［内］、⑨はなれやはする―花や忘るゝ［内］、⑩法華―法花経［内］、（一六・ウ）①ちかつけしと―近付へからすと［内］、③ちかつき侍らし―近つけ侍らん［内］、④なり―にや［内］

468
　　受二持法華名一者福不レ可レ量何況擁下護具
　　足受持上といふ文のあたりを見て持経者の
　　結縁たのもしくや侍りけむ読侍りける
　　　　　　　　　　前大僧正快雅
嬉しくそ名をたもつたにあたならぬ御法の花にみを結ひつる
　　かりに法華経といふ名をたもつを花にたとへ
　　一部全受持し侍るを実を結ふといへり　（一七・オ）

【校異】（一六・ウ）⑥受持上—受持上［承］、⑥文の—ナシ［内］、⑥見て—誦［内］、⑦けむ—けんと［内］、⑧快雅—快修［内］、集付ナシ—千載［内］

469

厳王品

為通朝臣

深山にてさとり晴けるいにしへの月や馴にし友さそふらん

此品には四聖の前縁といふ事ありむかし四人心をおなしくして法花経を修行せしに里にいたりて衣食の便をもとめ又ゆふへには山に帰りて道を修せしにそのあはひとをくして日〻のかよひにつかれはて修行ものうく侍り其時四人の中に一人申けるは三人こゝをさらすして修行をはけまし（一七・ウ）侍れわれ一人里に日〻にいたりてはくゝむへしといへり三人それを嬉しき事に思ひて山ふかく籠居して修行す一人は里にくたり頭陀をして約束せしかことくやしなひけるに彼一人或時大王の行幸を見侍りてうらやましくおもへりしかるに彼法花修行の功有漏の果報にむくひ侍りて世〻に王にむまれぬをはりに妙庄厳王と申王に生れたり以外の邪見の悪王にて侍りされは此果報の後あく道におち侍らん事決定せりそのとき三人これ（一八・オ）を見て思ふやうは我等修行をはけまして既に仏果にちかつき侍る事も彼一人のはくゝくむによれりその恩を忘て堕獄せしめむ事くちをしかるへしいかゝしてかれをすくはむとうちあつまりて談合せしにその時彼中に一人申やう少〻の事にては仏道に心を引入かたかるへし所詮三人の中に一人きさきに生れ二人は子と変して心を引侍らんといふあひたその義にまかせて一人（一八・ウ）は浄徳婦人と申后に生れ二人は浄蔵浄眼といふ子に生れきてさまく〳〵に方便してつゐに雲雷音王仏と申仏のみもとへいさなひてさとらしめ侍りきされは今の哥にさとり晴たる月とは三人の事なり友とは妙荘厳王の事なり

【校異】（一七・オ）⑤事あり—事也有［内］、⑥四人—人［内］、⑧山に—ナシ［内］、⑨とをくして—遠しなり［内］、⑨かよひに—通ひ［内］、⑨はて—はてゝ［内］、⑩侍り—侍ける［内］、（一七・ウ）①三人—三人は［内］、③三人それを—三人は［内］、④籠居して—閉籠て［内］、⑤くたり頭陀をして—くたりて頭陀して［内］、⑤約束せしかことく—約束のことく［内］、⑥ける—侍る［内］、⑥行幸を—行幸に［内］、⑧修行の功有漏の—修行者功者偏の［内］、⑨侍りて—侍り［内］、⑩生れたり—現せり［内］、（一八・オ）②せり—なり［内］、③我等—われく〳〵［内］、③修行を—修行［内］、

④はくゝむ―はくゝみ［内］、⑧一人―ナシ［内］、⑧少ゝの事にては―少ゝにて［内］、⑩一人―一人は［内］、⑩子と―子に［内］、（一八・ウ）②婦人(ぶにん)―夫人［内］夫人(ふにん)［承］、③生れきて―生れて［内］、③さまぐ\に―やうぐ\に［内］、⑤今の―今［内］、⑥友とは―友さそふとは［内］

法印憲実

470 時雨ねとをのれ移ふ柞原木の下露のいかて染けん

【校異】（一八・ウ）集付ナシ―続後撰［内］、⑨いかて染め―いか(て)そめ［内］

祝部成仲

471 たらちねをまことの道にすゝめ入て子はいか斗嬉しかるらん　（一九・オ）

【校異】（一九・オ）集付ナシ―同［内］

権律師玄覚

472 まよひこし心の闇をしるへにて子を思ふ道に月をみる哉

いつれの哥も二子婦人の教引(けういん)によりて仏道に父の入侍る事を読侍り中にもはしめの哥は二子まつ父をすくふへきやうを母の婦人に申給ひしを木のした露のいかて染けむといへるにやすゑの哥は子を思ふ道に月を見るとは二子のすゝめをうけひくは子を思ふからなりをのつから善知識(ぜんちしき)となりてさとりをひらく故に月をみるといへり　（一九・ウ）

【校異】（一九・オ）集付ナシ―新続古［内］、③こし―こし(コシ)［内］、④婦人―夫人［内］、④教引(けういん)によりて―教に引れて［内］、⑥二子―二子の先［内］、⑥父を―父に(を)［内］、⑦母の婦人に―母のまへにて［内］、⑧すゑの―末なる［内］、⑨うけひくは子を思ふからなり―うけひけはおもひよらすなから［内］、（一九・ウ）①ひらく故に―ともに開侍ゆへに［内］

前大納言為定

473 いまそしる枝をつらぬる木の本にさとりひらけし親の心は

【校異】ナシ

頓阿

474 しるへして又木の本にさそひしやおなし山路の契なるらん

まへの哥に枝をつらぬるとは連枝(れんし)をいひ後のうたは昔の契くちすしてともに仏道に入侍るなるへし

【校異】（一九・ウ）※［内］ニハ当該歌ナシ、詠者名ト左注ノミアリ。⑥まへの哥に枝をつらぬるとは連枝(れんし)をいひ―前の哥は連子を枝をつらぬると云［内］

定家

475 子の道をしるへと頼む跡しあらは迷し闇も空にはるけよ　（二〇・オ）

母のために法華経をかき侍りける時読侍りける

むかし厳王(ごんわう)の二子の汲引(きうゐん)によつて心の闇(やみ)はれし跡をつひてわか母をもしかあれと也

【校異】（一九・ウ）⑨法華経をかき侍りける時―経書ける時［内］、⑨読侍りける―ナシ［内］、集付ナシ―新拾遺［内］、（二〇・オ）①あらは―あれは［内］、①迷し闇も空にはるけよ―迷し闇もけふははるけよ［承］、②汲引(きうゐん)によつて―汲引(うけイ)によりて［内］吸引(きうゐん)によ

つて［承］、③つひて—つきて［内］、③母をも—母も［内］

476

又如三一眼之亀値二浮木孔一(マタコトシイチガンノカメノアヘルカウキキノアナニ)のこゝろを

俊成

我やこのうき木にあへる亀ならん劫はふれ共法はしらぬを
仏法にあひ侍るは目しひたる亀(かめ)の浮(うき)木のあ
なにあへるかことしととけりそれをいまの作者
仏法をえ侍らぬはさなからうき木の亀そと
なけくよしなり

【校異】（二〇・オ）④一(イチガン)眼—眼［内］、④のこゝろを—ナシ［内］、⑧ととけり—と云り［内］、⑨仏法を—心に仏法を［内］、⑩よしなり—よしなり如何［内］

477

願三母放二我等出家作一沙門一(ネカハクハハヽユルシ玉ヘワレラカシユツケシテナランコトヲシヤモント)のこゝろを

前大僧正慈鎮

（二〇・ウ）

たらちねをみちひかんとやたゝちめにこひし暇の末そ嬉し[き]
二子父を仏所へみちひかんとてまつ母の婦人
に出家をゆるし給へといとまをこひし事
なり其時母ちゝに申せは父のゆるし給はゝ
われもろともに仏の道にまいり侍らんとの
たまひし事なり

【校異】（二〇・ウ）①のこゝろを—ナシ［内］、②前大僧正—ナシ［内］、③とや—とや(て)［内］とて［承］、③たゝちめ—たらちめ［内］、③こひし暇—恋し今(こひしいとま)は［内］、④仏所へ—仏所に［内］、④母の—母を［内］、④婦人—夫人［内］、⑥母ちゝに申せは父の—父母に申せしに父［内］、⑦道に—みもとに［内］、⑧事なり—こと歟［内］

478

善知識者是大因縁(ゼンチシキハコレタイインエンナリ)のこゝろを

前大僧正慈鎮

（二一・オ）

人のきてみちひく野へに出ぬれは麻の中なる蓬をそみる
厳王邪見即正(こんわうじやけんそくしやう)のさとりひらけてのちはこ
れしかしなから二子の教化(けうけ)によるゆへに善知識(せんちしき)
なりとの給ひ侍りそれを麻の中なる蓬(よもき)
にたとへていへり

【校異】（二〇・ウ）⑨のこゝろを—ナシ［内］、⑩前大僧正慈鎮—ナシ［内］、（二一・オ）①のきて—のきゝて［内］、③教化によるゆへに—教化故也たゝ［内］、④中なる—中の［内］

479

勧発品(クハンホツホン)

定家

東風に散しく花の匂ひきて鷲の御山のあるしをそ[思]

【校異】（二一・オ）⑦定家—定家卿［内］、⑧東風—東風かせ［内］、⑧花の—花も［承］、⑧[思]—問［内］

480

前大僧正慈鎮

聞はつる花の御法の末にこそ定めをきける身共しりけれ

（二一・ウ）

勧発(くはんぼつ)とは法をこふる詞なり既(すで)に上の品の
とき法花経みな説をはりて席(せき)をまかむと
せしに東方宝威徳上王(とうはうほういとくしやうわう)と申仏の国よ[り]
普賢(ふげん)と申菩薩(ぼさつ)霊山(りやうぜん)にきたりて本国(ほんこく)に
て遙(はるか)に法華経を聞侍りきさて如来滅(めつ)
後の衆生はいかにして修行(しゆぎやう)をなし此経を

え侍るへきとすゝめ奉り給へり是によつ
て釈尊要を促て結要と申事を説
給へり如来の滅後には此四法を修行せは
法華をえたるなるへしとなりはしめの哥に
東風に散しく花とは霊山説法のをはり
侍る事なりあるしをとふとは四法を仏に勧　（二二・オ）
発し奉る事なり後の哥に定をきけ
る身といへるはすゑの世にも此四法を修行
せむものは成仏の器そとの給ふ事をいへり

【校異】（二一・オ）⑨前大僧正慈鎮—ナシ［内］、⑩ける—ぬる［内］、⑩けれ—ぬれ［内］、（二一・ウ）①とは—と云るは［内］、①詞—こと［内］、②をはりて—給て［内］、③せしに—せし時［内］、④普賢—普賢菩薩［内］、④と申菩薩—ナシ［内］、④本国—我本国［内］、⑤遥に法華経—遥我は法花経［内］、⑥いかにして—いかに［内］、⑥なし—なしてか［内］、⑦よつて—より［内］、⑧促て—つゝめて［内］、⑧結要—四結要［内］、⑨法華—法花経［内］、（二二・オ）①散しく花とは—散花の匂ひとは［内］、①霊山—霊山の［内］、③事なり—なるへし［内］

従二東方一来所レ経諸国普皆震動雨二宝
蓮花一のこゝろをよみ侍りける

俊成

481 さらに又花そ降しく鷲の山法の筵の暮かたの空

普賢の彼国より来りし道すから宝蓮
花をふらする事をいひなからしかも霊山の　（二二・ウ）
説法をはりたる事をふくめりさらにまた
降しくとはかさねて四要の法をとかしむる
事なるへし暮かたの空とは廿八品のするゑ
なれはしかいふなるへし

【校異】（二二・オ）⑦よみ侍りける—ナシ［内］、⑧俊成—俊成卿［内］、⑨暮かたの—夕暮の［承］、（二二・ウ）①ふらする—ふらせし［内］、①事をいひなからしかも霊山の説法をはりたる事をふくめりさらにまた—ことをふくめりさて更に［内］、③とかしむる事なるへし—とかしめ給ふ事なるへしされは［内］、④空とは—空と云り［内］⑤なれはしかいふなるへし—はれは也［内］

法印成運

482 見ぬ人のためとや鷲の山桜ふた度とける花の下ひも

【校異】（二二・ウ）集付ナシ—続千載［内］、〈左注ナシ〉—心かみのことし［内］

満二三七日一已乗二六牙白象王一のこゝろを

中原有秀

483 待出ていかに嬉しく思ふらん廿日あまりの山の端の月

此経をもしは書写しもしは読誦して一　（二三・オ）
心に精進しておこたらすは三七日を満せ
むときわれ六牙の白象に乗してその人の前
に現してまみゆへしと普賢菩薩のちか
ひ給ふゆへに山の端の月を待出るにたとへ
てよめり廿日あまりは三七日の満するなる
へし

【校異】（二二・ウ）⑧有秀—有安［内］［承］、（二三・オ）⑩嬉しく—嬉しと［内］、（二三・オ）③白象（さう）—白象王［内］、⑤給ふゆへに—給へる故に［内］、⑤たとへてよめり—たとへたり［内］

仙洞にてかさねて如法（によほう）経書写（しよしや）し侍し時
普賢大士白象（びやくざう）王に乗して夢のうちに
現し給ふ事をよみ侍りける
権大僧都宣実　（二三・ウ）

484
見る夢の面影までやうかふらんきさのを川の有明の月

きさの小河は名所なり象（さう）の字（じ）をきさとよみ侍るゆへにきさの小川と読侍る歟

【校異】（二三・オ）⑧経書写（しよしや）し—写経し［内］、⑨白象（びやくざう）王に乗して夢のうちに現し給ふ事を—乗白象王の夢の心を［内］、（二三・ウ）①宣実—憲実［内］［承］、集付ナシ—続古今［内］、③小河は—を川［内］、④と読侍る歟—によせ給へるなり［内］

宗尊親王家三川

485
曇なき法の光のさしも草露も迷ももしや残さん

是も普賢白象（ふけんびやくざう）の現身（げん）に行者（ぎやうじや）の前に現するを光のさしも草にたとへしかも此大士は懺悔滅罪（さんげめつざい）の教主（けうしゆ）なれは露も迷（まよひ）も残らすとは罪（つみ）のきゆる事なりやの字はやはと心得へし　（二四・オ）

【校異】（二三・ウ）集付ナシ—遺風［内］、⑥露も—露の［内］、⑦白象（びやくざう）—白象王［内］、⑦現身（げん）に—現身の［内］、⑧するを—することを［内］、⑧草にたとへ—草とたとへたり［内］、⑧しかも—尓（ぞイ）も［内］、⑨露も—露の［内］、⑨残らす—残らし［内］、⑩やの字は—やの字［内］

成二就四法一（シャウシウスルシホウヲ）のこゝろを読侍りける
前大僧正慈鎮

486
法の水を仏の御名につたふとて四の心に結ひ入ける

四法とは一に諸仏に護念（ごねん）せられ奉り二にもろ〳〵の徳の本をうへ三に正定聚（しやうぢやうじゆ）に入四に一切衆生をすくふ心を発（をこ）せとの第一のこゝろを法の水をほとけの御名につたふとはいへる歟

【校異】（二四・オ）②のこゝろを読侍りける—ナシ［内］、③前大僧正—ナシ［内］、④御名—御子［承］、④心に—心そ［内］、⑤とは—と云は［内］、⑤奉り—奉る［内］、⑥もろ〳〵の徳の本をうへ—殖諸徳本［内］、⑥に入—ナシ［内］、⑦との—となり［内］と也［承］、⑧御名—御子［承］、⑨いへる歟—云なり［内］

殖二衆徳本一（ウヱルモロ〳〵ノトクホンヲ）のこゝろを

487
稀に逢御法の花の色みてそ殖けむ世〻の種もしらるれ　（二四・ウ）

【校異】（二三・オ）⑩殖二衆徳本一（ウヱルモロ〳〵ノトクホンヲ）—殖諸本［内］、〈詠者名ナシ〉—頓阿［内］、（二四・ウ）①しらるれ—しらるゝ［内］

即往二都率天一（スナハチユクトソツテンニ）の心を
俊成

488
はるかなるその暁を待すとも空の気色は見るへかりけり

此品に法花修行の人は都率天（とそつ）の弥勒（みろく）菩

薩のわたらせ給ふ所へ生るへしとみえた
れは三会下生(ゑげしやう)の暁をまたすともはや彼
菩薩にあひ奉るへしとなり

【校異】（二四・ウ）②天一(テンニ)―天上［内］、②の心を―ナシ［内］、④見るへかり―見つへかり［内］［承］、⑤此品―経［内］、⑥所へ―所に［内］、⑧となり―と云り［内］

皆是普賢威神之力(ミナコレフケンノイシンノチカラナリ) のこゝろを

前大僧正慈鎮

489 霜をはらふあるしとなれる力とて枯ぬ御法の花を見る哉

**（二五・オ）**

霜をはらふあるしとはさきにいへるかことく
懺悔滅罪(ざんげめつざい)の教主(けうしゆ)なりといふ心なりその故に
後五百歳の末の世も閻浮提(ゑんぶだい)に此経流布(るふ)
する事此大士の力なるへしといふ心なり

【校異】（二四・ウ）⑨のこゝろを―ナシ［内］、⑩前大僧正―ナシ［内］、（二五・オ）①花を―花も［内］、②いへるかことく―云ることく［内］、③なりといふ心なりその故に―なると云なりそれ故［内］、④世も―世〳〵も［内］、④此経―此経の［内］、⑤する事―すると［内］、⑤といふ心なり―と云なり［内］

受二持仏語一作レ礼而去(ジュヂシフツゴヲナシテレイヲサリニキ) のこゝろを

490 馴〳〵て涙の雨やくもるらん帰る空なき鷲の深山路

八ケ年の経を説をはりぬれは猶帰る人さへなき
となり

【校異】（二五・オ）⑥〈詞書〉―ナシ［内］、〈詠者名ナシ〉―慈鎮［内］、⑧の経を説―をへてとき［内］、⑧人さへなきとなり―人すくなきとなり［内］

寂然

491 ちり〳〵に鷲の高根をおりそ行御法の花を家つとにして

**（二五・ウ）**

この経を受持(じゆち)し侍りて霊山(りやうせん)よりをりくた
りし人にはさなから花を土産(みやけ)に折かさすかこ
としといへり

【校異】（二五・オ）⑨寂然―ナシ［内］、集付ナシ―新勅［内］、（二五・ウ）①侍りて―侍りて八ケ年のおはりに［内］、①くたりし人には―くたる人ゝ［内］、②花を土産(みやけ)に折かさすか―家つとに折かさせる［内］

普賢経(フゲンキヤウ)

定家

492 朝日影思へはおなしよるの夢別にしほるしのゝめの露

仏初成道(しよしやうだう)のあした花厳(けごん)経とき給ひし時
は仏日はしめていつれは朝日影といへりさて
普賢経の時いま三月を過て涅槃(ねはん)し給ふ
へしと告(つげ)給へは五十余年の御在世たゝ春
の夜の夢のことしかつ〳〵この告よりしてか **（二六・オ）**
なしむ心の侍れは別(わかれ)にしほるしのゝめの露
といへり

【校異】（二五・ウ）⑤定家―定家卿［内］、⑦花厳(けごん)経―花厳経を［内］、⑧いつれは―出ぬれは［内］、⑧さて―さて法花経を説終て［内］、⑩春の夜の―ナシ［内］、（二六・オ）③といへり―と云る歟［内］

493　兼てよりかすめる空の色を見る春の半の入かたの月　　参議雅経

かねてより霞といへるは普賢経のとき却後三月当二涅槃一と告給へる事なるへしさて二月十五日まさしく涅槃に入給へは春の半の入かたの月といへり

【校異】（二六・オ）③参議―ナシ［内］、⑤霞―霞る［内］、⑥涅槃一―般涅槃［内］、⑦十五日―十五日に［内］、⑦給へは―給へるは［内］

我心自空罪福無レ主のこゝろを

494　かつま田の池の心はむなしくて氷も水もなのみ成けり　　寂然

**（二六・ウ）**

此経文は観無生の懺悔をとく文なり観無生といへるは我心の空寂なる事を観し侍れは罪とかとても造ぬしなく善根も又しかなり是によつて罪福ともに朝の露霜のことくに観念にてらされてとけはつるといふ心よ氷はつみ水は善根つみはあく福は善なり

【校異】（二六・オ）⑨のこゝろを―ナシ［内］、⑩寂然―寂然法師［内］、（二六・ウ）④造―つくなる［内］、⑤よつて―よりて［内］、⑥心よ―心か［内］

衆罪如二草露一恵日能消除のこゝろを

495　露霜とむすへる罪のくやしさを思ひとくこそ朝日成けれ　　俊成

【校異】（二六・ウ）⑧草露一―霜露［内］、⑧のこゝろを―ナシ［内］、⑨俊成―ナシ［内］、集付ナシ―新後撰［内］、⑩くやしさ―くやしき［内］

496　頼むかな浮世を秋の草のうへに結ふ露霜きゆる日影を　　定家

**（二七・オ）**

【校異】ナシ

497　露霜の消てそ色は増りける朝日にむかふ岑の紅葉ゝ　　宗尊親王

【校異】（二七・オ）④紅葉―黄葉［内］

498　散しきし花の匂ひの名残たにたゝまうかりし法の場哉　　西行

散しく花は法華経のをはる事なるへし此普賢経は法花の結経なれは八年の名残おほくしてたゝまうしといふ心か

【校異】（二七・オ）⑥名残たにたゝまうかりし法の場哉―余波おほみたゝまくおしき法の庭かな［内］、⑦花は―花の匂ひは［内］、⑦法華経―法花［内］、⑧法花の結経なれは―法花経結経の座なれは［内］、⑧名残―余波［内］、⑨たゝまうしといふ心か―たゝまくうしと云心也［内］

見二諸障外事一のこゝろを

499　春の夜の霞や空に晴ぬらん朧けならぬ月のさやけさ　　源兼氏

**（二七・ウ）**

此経の中に六根懺悔の方軌を修し大乗の経典を読誦して普賢大士を見奉ること

を説給へりさはりの外（ほか）の事とは六根（こん）の罪障（さいしやう）
の外の事なり春の夜の霞の晴るゝとは罪（つみ）の
うすくなる儀なりおほろけならぬ月を見る
とは諸仏菩薩（しよぶつ）を見奉るなるへし

慶安五年仲春　風月庄左衛門

【校異】（二七・オ）⑩のこゝろを—と云心［内］、集付ナシ—新後撰［内］、（二七・ウ）④普賢大士を—普賢大士のを［内］、⑥の外の事—ナシ［内］、⑤とは—は［内］、⑦うすくなる儀なり—うすくなる也［内］、⑧なるへし—ことなるへし［内］⑨［承］本、九行目ヨリ、「十界分」トシテ歌ノ増補アリ（補遺参照）、⑩慶安五年仲春　風月庄左衛門—（「十界分」ノ後、二八丁・ウラ・十行目ニ）承應二仲秋吉　風[月庄左衛門]（刊行）［承］

※［内］ニ次ノ奥書アリ。

予所編緝之譯和ゝ歌集之中法華部歌可
加注解之由任於檀命應厥所請于首（旨）梗齋
玄修有寫模之悃望仍書両巻授与之畢
法印實海（在判）

## 補遺

底本である国文学研究資料館所蔵　慶安五年刊『訳和和歌集』は、499番歌をもって終わるが、底本の虫損箇所を補う上で採用した駒澤大学図書館所蔵　慶安五年刊『訳和和歌集』と、これまで対校本として用いてきた国文学研究資料館所蔵　承応二年刊『法花訳和集』には、499番の実海注のあと、次の行より「十界分」とあり、十首の歌が増補されている。（注）しかし、この二つの「十界分」の間には、詠者名の有無や語句の異同が見られるため、以下のように二段に分けて、それぞれの「十界分」を載せることとする。ただし、下段の国文学研究資料館所蔵『法花訳和集』の虫損箇所（□で囲んだ部分）については、叡山文庫所蔵本によって補った。また、明らかに誤字と思われる箇所については、（ママ）とした。

**駒澤大学図書館所蔵**
**慶安五年刊『訳和和歌集』**

十界分　**（二七・ウ・九行目〜）**

地獄
もゆる火もとつる氷も消やらて
　幾世迷はん長夜の夢

餓鬼
身をせむるうへの心に堪かねて
　子を思ふ道を忘れぬる哉

畜生
水にすみ雲井にかける心にも
　浮世の夢はいかゝのかるゝ

修羅
波たてし心の奥のはてはまた
　苦しき海の底に住哉

**国文学研究資料館所蔵**
**承応二年刊『法花訳和集』**

十界分　**（二七・ウ・九行目〜）**

地獄　後京極
もゆる火もとつる氷も消すして
　[幾世迷は]ぬ長夜の夢

餓鬼　同
身をせむるうへの心に堪かねて
　子を思ふ道そ忘れはてぬる

畜生　同
水にすみ雲井にかける心にも
　浮世の雲はいかゝかなしき

修羅　同
波たちし心の道のすへはまた
　苦しき海の底に住哉

人道
いたつらに月日はかなく明暮て
又はえかたき身共知らすや

天道
玉かける跡には露を置かへて
色おとろふる天の羽衣

声聞
終りなく苦しき道にまよはまし
鷲の御山の法に逢すは

縁覚
奥山に独り浮世は覚りにき
常ならぬ色を風に任て

菩薩
秋の夜の文字は一よを限にて
かつ〳〵残る月も猥(ママ)なき

仏界
くらからし雲はさなから晴のきて
又うへもなくすめる月哉

---

人道　同
ゆめの世に月日はかなく明暮て
又はえかたき身共知らすや

天道　同
玉かけし跡には露を置かへて
色おとろふる天の羽衣

声聞　同
はてもなくむなしき道にきえなまし
鷲の御山の法に逢すは

縁覚　同
奥山に独り浮世は覚りにき
常なき色を風に詠て

菩薩　同
秋の月もちは一よを隔にて
かつ〳〵残る影そ猥(ママ)なき

仏界　同人
くらかりし雲はさなから晴つきて
又うへもなくすめる月哉

---

（注）拙稿「『訳和和歌集』翻刻と解題　附校異（四）」（『文献探究』第四二号七五頁、平成一六年三月）において指摘した。この「十界分」の増補と、「能星」作とされる歌三首の増補とが、改訂の進んでいった『訳和集』刊本に見られる大きな特徴である。後者については、同拙稿（一）四九頁で述べ、続く（二）において「能星」という人物とその歌に関する考察を試みた（『文献探究』三九、四〇号・平成十三、十四年三月）。現在四つに分類できる『訳和集』刊本の成立過程については、那須陽一郎氏による『訳和和歌集』本文の研究―慶安五年刊本・承応二年刊本　本文異同一覧―」（『日本大学大学院国文学専攻論集』第一号、二〇〇四年、九月）がある。

付記　長きにわたり、翻刻掲載の御許可を賜りました国文学研究資料館・内閣文庫・駒澤大学図書館・叡山文庫の各館に、記して深甚の謝意を申し上げます。

（うちの　ゆうこ・西南学院大学非常勤講師）